

何度も会ったわけじゃないのに、忘れられない奴というのがいる。俺にとっては、ヨシオ・石丸いしまるがそんな人間だった。

初めてヨシオと会ったのは今から十年も前、俺がまだB・D・Tで私立探偵をやっていたときだ。今ではもうこの「B・D・T」という言葉もあまり使われなくなった。だから説明が必要だろう。

B・D・Tという言葉が流行ったのは、二〇四八年だった。その頃の東京は今とちがって、東と西で大きく分かれていた。二〇一〇年、不法滞在外国人の増加に手を焼いた政府が〈新外国人法〉を制定し、「この国で生まれた子供に対しては両親の国籍にかかわらず日本国籍を与え、かつその扶養者一名については永住権を与える」ことが決まった。直後、日本、特に東京におけるベビーブームが爆発した。今、二十歳から四十歳までの東京に住む人間の三割が混血なのは、まさにその結果だ。しかも二〇四八年当時は、その混血児の九割が、東京の一部地域に住んでいた。それが地域のスラム化をうながし、旧新宿区しんじゅく全域、渋谷しぶや港みなと、豊島としま、大田おおたの旧区の各一部が純粋日本人が住まない土地となった。

その一帯につけられた名が「B・D・T」だ。BOIL DOWN(煮つめる)とDOWN TOWNをひっかけた造語で、自らも混血児である作家、ヨシオ・石丸が発表した小説のタイトルだった。

混血児たちは、これももうあまり使われなくなった言葉だが「ホープレス・チャイルド」と呼ばれた。スラムの片隅で生まれ、路地裏で育ち、ハシの使い方より先にナイフの使い方を覚え、算数はかっぱらった品物を分配するために必要で、読み書きはブタ箱の中で学ぶ。

役人はいつだって遅れたことしかない。四十年遅れて〈新外国人法〉を制定し、今度は二十年遅れて〈新東京〉を造りあげた。〈新東京〉は、中心部が極端にスラム化した東京を再生させるための試みで、まず東京湾に馬鹿でかい人工島を作りだし、そこに原子力発電所を建設した。あいつぐ事故に、東京近郊の地方自治体が、東京のための原発を懐ろにかかえるのを嫌がりだしていたのもその理由だ。

人工島の原発は、千葉、神奈川、埼玉の一部を併合した〈新東京〉への電力供給を果たした。同時に〈新東京〉は、東、西、北の三ブロックに分割された。それぞれの行政府とは別に、新都庁が旧B・D・Tの東ブロックにおかれている。

南ブロックがないのは、人工島がそれにかわる存在だからだ。当初人工島は、国会を含む行政府が移転する筈だった。だがいつだって、寿命が縮むのを嫌がるのは、先のない年寄りの金持どもだ。国会は、原発のある人工島への移転を反対大多数で否決した。旧千代田区ちよだほどの大きさのある人工島は、原発をのぞき無人の島と化した。

ここまでならよくある税金の無駄づかいという奴だ。十五で弁護士事務所の使い走りを始め、市民権をとった俺は、そこいらの日本人よりはるかに多くの税金をおさめている。だが腹を立てる気もない。最近の調査では、二十歳を超えた「ホープレス・チャイルド」の一割近くが、まだ戸籍をもつ

ていないという話だ。

この人工島に目をつけたのが、この十年で嘘のように息を吹きかえした映画産業だった。テレビにくわれ、映画館は一部のマニア向けの場と化していたのだが、「三大天才」と呼ばれる映画関係者の出現が、この国の映画産業を救った。現在、映画館の数は過去最多だった二〇〇九年に並び、動員人数も毎年最多数を更新している。それを支えているのが、ホープレス出身の俳優だ。むろんのことプロデューサーも日本人ではなく、中国系、インド系の連中だ。彼らは、中国、インドという、アジアの二大市場との興行パイプを握っている。

最初に人工島に巨大スタジオを建設するとぶちあげたのが、「三大天才」のひとり、中国系プロデューサーのワン・コングだ。それにインド系の製作会社からみ、神奈川に大半があつた映画製作スタジオはそのすべてが人工島に移転した。新東京はそれをもちろ手をあげて歓迎した。ハリウッドを超える映画製作スタジオの建設というニュースが全世界に流れ、アジア地域からの観光客の最大の呼びものになった。ちなみに、かつての日本の映画会社、配給システムは、二〇二〇年までにすべてが倒産、あるいは解散していて、日本旧来の映画会社は今も存在しない。プロデューサー個人が率いる製作会社がスタジオと使用契約をかわし、配給は各映画館の管理会社とのあいだで、ひとつひとつの作品ごとに決定される。その結果、完成しても映画館にそっぽを向かれる作品のプロデューサーはピストルをくわえるし、逆に大当たりすれば、日本中の映画館の五割が同じ作品を上映することも夢じゃない。

人工島は「ムービー・アイランド」と呼ばれ、映画スターの多くや監督、脚本家たちが、海に面する恵まれたロケーションの住宅を、スタジオ管理会社から提供されている。しかも人工島における電力使用料金は、スタジオ移転の際の契約で、法人個人を問わず半額と決められている。もちろんこれ

は抜け目のないワン・コングが、都とのあいだにかわした特約だった。

ワン・コングはムービー・アイランドの帝王として君臨した。その商才は、映画作り以外にも発揮された。撮影中、ムービー・アイランドに滞在する俳優・スタッフのためのホテルを拡大し（ムービー・アイランドに住みながら俳優もいた）、観光客誘致を目的としたムービー・アイランド・ハイアット・リゾートホテルを建設した。このホテルに宿泊する者だけに、ムービー・アイランド内のスタジオを見学できるという特典をつけ、目の玉の飛びでるような料金をふんだくるのだ。収容客千人に達するホテルでありながら、予約は一年先まで埋まっているという。

そのワン・コングも高齢を理由に、帝王の座を降りた。それが二年前だ。今はムービー・アイランドは、スタジオ・カンパニーと呼ばれる、プロデューサーや投資家を中心とした集団によって運営されているらしい。もつともスタジオ・カンパニーの頂点に、中国人やインド人、ましてや日本人はいない。スタジオ・カンパニーを陰で牛耳っているのは、ロシア人とチェン人だといわれていた。

映画産業を復活させた「三大天才」とは別の、もうひとりの立役者が、犯罪組織だったからだ。犯罪組織の海外送金を監視する国際機関 FATF が力を強めたため、マネーロンダリングの新たな手段として、映画への投資が浮上したのだ。したがってワン・コングの「引退」も、高齢が真の理由ではない、という噂もある。

話がそれたようだ。その朝俺は、いつものようにコテージをでて、エミイが眠る、島の南西の丘への散歩をすませたところだった。

朝起きてまず、エミイのもとにいくのが俺の日課だった。コテージから共同墓地までは、約四キロのゆるい登り坂だ。その道のりの半分をゆっくり、残りの半分を全速で駆け登る。息が切れ、頭の中

をまっ白にすることで、たったひとりの目覚めから生まれる自殺願望を頭の中から締めだせる。

そしてエミイの莖のかたわらに立ち、海を眺め息が整うのを待つうちに、今日も何とか生きていけそうだと思えるようになる。石板にはめこんだエミイのホログラフは、死にたがっている俺に、いつも怒った表情を見せるからだ。

——ケンの馬鹿、何考えてるの。自殺なんかしたら、あたし決して許さないから。

エミイが亡くなる前の二カ月、俺は毎夕、エミイをおぶってこの道を登った。コテージには車椅子もあったが、生きている限り、俺はエミイの温もりを直接感じていたかったのだ。それに最後のふた月、百六十八センチの身長があったエミイの体重は三十キロを切っていた。エミイを連れていったのは、共同墓地ではなく、その手前にある見晴し台だ。

俺たちは潮と風とに削られた木製のベンチにかけ、夕陽が海に溶けこんでいくのを、手を握りあったまま毎日、見つめた。エミイの命が尽きかけていることは、ふたりともわかっていた。だからこそ俺は、生まれ育ったB・D・Tを捨て、このオガサワラにやってきたのだ。

運のいい日は、溶けた夕陽に向かって泳ぐクジラの群れが見えた。

エミイの命を奪ったのは、出生から十歳までを旧新宿区で過ごしたホープレス・チャイルド百人にひとりが発病する「新宿病」といわれている、悪性の腫瘍だった。原因はまだわかっていない。汚染した井戸水を飲用にしたのが最大の可能性だといわれているが、水道水の供給がほとんど停止していた旧新宿区で、井戸水を飲まなければ、ほとんどの人間が生きのびられなかった。特に発病例が多かったのが、東新宿の地下駐車場で巣食っていたガキどもだ。十五歳以下で、どこの組織にも属さず、徒党を組みただ甘いものに群がるアリのように、止められた車を奪い、人間を襲うために生きていた。

ある時期、奴らは最も恐れられていた。生まれてからこっち、誰にも愛されたことのない捨て子の集団で、目先の欲望を満たす以外には何の目的も希望もないガキどもだ。何十人という集団で襲われたら、そのうちの二人、三人をぶちのめしたところで何の効果もない。皆殺しにしない限り、こっちが殺される。

ところがこの五年で、奴らの数が激減した。原因がその腫瘍だった。ある者は脳にでき、歩くこともできなくなり、ある者は胃や腸にできて、血を吐いて死んだ。

国は知らん顔だった。戸籍をもたないホープレスが何人死のうと関係ないというわけだ。

この十年で、ホープレスの立場は大きく変わった。ヨシオのように「這い上がり」（外国人の成り上がり）をさす。密入国や不法滞在者が、事業に成功して市民権を獲得し、金持としてでかい面をする、日本人はそう呼んだ）の子供として旧西側で育ち、高い教育をうけた者ばかりではなく、弁護士や医師として成功をおさめるホープレス出身者もいる。

国会議員も四人が当選している。うちひとりには、俺もヨシオも知る人物だ。

いずれにせよ、エミイは死んだ。それから二年近くが過ぎていたが、俺はまだB・D・Tに帰る気はなかった。「B・D・T」が使われない言葉となり、東京がかわったといわれていても、俺には関係のない話だった。新青山しんあおやまにあった俺のオフィス兼住宅はとくに解約していたし、新東京弁護士会の調査員名簿から名前も削られている。

かつては最年少のAランク調査員といわれたが、それももうどうでもいい。

眠っているエミイにとりあえずの別れを告げ、コテージまでの道を、いつものように泣きたい気分ですべて下っていくと、その中腹にヨシオが立っていた。

「ハイ、ケン」

ヨシオは微笑んでいった。朝陽をうけて、十年前とかわらないまっ白な歯が輝いている。俺と同じで三十を超えている筈だが、二十四、五にしか見えない。

「ヨシオか……」

俺は立ち止まった。

「ずっとメールを送っていましたが、あなたのボックスは封印されていました。だから直接きてしまいました」

ミルクチヨコレートの肌をして、切れ長の目に捷毛まうげがおおいかぶさっている。整った鼻筋はかわらず、唇だけに、以前はひいていたルージュの色がない。

ホープレスの大半は、異性でも同性でも愛せる、バイだ。俺は珍しくストレートだったが、ヨシオもバイだった。だがそのヨシオが一年前に結婚したことを、俺はニュースで知っていた。相手は、ムービー・アイランドに住む女優だ。

「十年ぶりですね」

心もち首をかしげ、ヨシオはいった。突然現われたことを詫びるようすもない。ヨシオはいつもそうだ。優雅だが自分のやり方を決してかえない。デビュー作で「B・D・T」という言葉を生み出した天才作家は、今ではその全作品が映画化された大金持の流行作家だ。

「そうだな」

「初めて会ったときも、出版社からのアポイントを拒否していたあなたのところへ、僕が押しかけた」

俺は頷いた。懐かしくもあつたが、腹立たしくもあつた。

十年前のヨシオの依頼は、旧東側のナイトクラブで歌手として働いていた女の失踪調査だった。ヨ

シオは店の常連で、ガーナというその女に惚れていた。

調査するうちに俺は、復活を果たそうとしていた日本ヤクザと汚職警官がらんだ殺人事件に巻きこまれた。何度も命を狙われ、最後は警察や検察と組んで、ヤクザ組織を摘発した。ガーナは殺されていたが、その理由は、事件とはまったく別のことだった。

「この島に住んでどのくらいになるのですか？」

「三年、かな」

俺は答えた。火照った肌に心地よかった海からの風を、今は冷たく感じ始めていた。

ヨシオは首をふった。

「あなたはリアリストだと思っていました」

俺は肩をすくめた。

「年をくえばかわることもある」

そして歩きだした。十年ぶりに会う友人を立ち話だけで追いかえすわけにはいかない。

ヨシオをコテージに案内した。ベッドルームとリビングだけの質素な小屋だ。新青山にあった油庄収納式のガレージはなく、ピーに見つかれば十年はくらう銃器のコレクションもない。

リビングのテーブルにすわり、ヨシオは壁を見回した。エミイが描いたオガサワラの水彩画が四点、飾つてある。俺の肖像画もあったのだが、それはエミイの柩ひつぎの中におさめた。

「同じ人の筆だ。繊細だが、力強い」

俺はコーヒーをいれ、話をかえた。

「新東京はどうだ？ それともアイランドに住んでいるのか」

ヨシオは首をふった。

「アイランドに住んでいるのは彼女だけです。お互い、創作のためには、それまで住んでいた場所を離れない方がいい、という結論に達して。夫婦が同じ家に住まなければならぬという法律はありませんから」

俺は頷いた。ヨシオはコーヒーを飲んだ。

「おいしい。そういえば、オガサワラは、コーヒー農園があるのでしたね。新東京は、でもひどいことになっていきます。前ほど差別や対立はなくなっただけけど、お店がどんどん減って。ネットワークに操られるゾンビの街です」

この十年で、大きく変貌したのがテレビ局だった。統廃合をくりかえした、かつての地上波衛星波のテレビ局は、現在は三天ネットワークに集約されている。チャンネル数は二百。チャンネルの大半を占めるネットワーク製作の番組は、ニュースやスポーツ、コンサートなどのドキュメンタリー系が中心となっている。

テレビ局にこうした変化を迫ったのが、従来のインターネットによる「B to C」（企業対消費者間取引）の伸び悩みだった。企業どうしの取引である「B to B」は、低コスト化を促し、定着したが、「B to C」はテレビデジタル放送による通販という形で生活に入りこんだ。視聴者はリモートコントロール、あるいは音声入力によって、放送中、常に画面上に流れている商品を二十四時間、随時購入できる。食事の出前から、衣服、化粧品、自動車、不動産に至るまで、すべての買物をテレビを通じておこなえるようになった。

むしろそれは配達システムの整備された地域に限っての話だ。少なくともオガサワラでは、入力から十分以内に最新ファッションが届けられることはない。だがそれを不満に思う人間は最初からオガサワラに住まない。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。